

上伊那教育研究会Ⅱ 第16分科会「楽しいキャリア教育のススメ」報告

春富中学校

1 はじめに

上伊那教育研究会Ⅱでキャリア教育に関わる分科会が設けられて今年度で5年目になります。これまでの内容は、以下の通りです。

平成26年度	企業見学と講話（KOA株式会社）
平成27年度	企業研修を体験（サン工業）
平成28年度	社長による講話（ナパック） 田畑和輝先生によるワークショップ
平成29年度	上伊那図書館の歴史に学ぶ

実際に企業を訪問しお話を聞くということ、また企業にとっては学校現場の考えを聞くということは、お互いに貴重な機会となりました。昨年度は上伊那図書館（現在の創造館）の建設に当たって尽力した地元の実業家、武井覚太郎さんや、月給から寄付を続けた当時の学校の先生たちの取り組みに学び、当時も「産・官・学」が連携して地域の子どもたちを育てるといふ、今のキャリア教育にもつながる人々の姿勢や歴史に思いを馳せました。

（昨年度「キャリア教育委員会 ホームページでも紹介）

分科会の内容を今年度もコーディネートしてくれたのは上伊那広域連合の傳田智子さん。今回も「先生方のニーズに応えたい」と昨年度に引き続き3名の方に講師を依頼。会場も昨年度と同様、創造館をお借りしてそれぞれの講師の先生のお話の後、感想シェアリングと休憩を入れて、おひとり50分を1セットの3セットで研修を実施しました。



2 研修の実際

(1) 濱慎一先生（伊那市創造館学芸員）

最初に、創造館で展示されていた「学校のはじまり」を濱先生の案内で見学。寺子屋の様子が描かれた絵をみながら、当時の“先生”は地域の大人が買ってでていたことなども解説していただき、ここでも「地域が子どもを育てる」土壌がすでにあったことを実感。教科書や地図等、貴重な資料を見学させていただいた後は、「上伊那図書館」が建てられるまでの願いや地元の人々の働きかけ、「創造館」となった現在も果たしている役割を、昨年度同様お話頂きました。戦争中は上伊那図書館で徴兵検査が行われたこと、終戦直後には進駐軍が図書館を訪れたこともあったこと、そして戦後文化・教育の中心として様々な活動の拠点となり、今から8年前に市の有形文化財となったことなど、歴史的な背景とそこに生きる人々の思いに触れるお話でした。

【参加者の感想より】

- ・徒歩5分くらいのところにお家があり、高校の頃自習に通ったり中学で写生にきたりしましたが、建てられたまでの歴史や中の様子は全く知りませんでした。吸い込まれるように資料や展示を拝見しました。ゆっくり職員研修で来てみたいです。
- ・濱先生のお仕事に対する熱い思いを感じました。私にとってもキャリア教育になりました。
- ・教育というものが当たり前のものではないこと、地域の人たちの思いによってはぐくまれていること、この上伊那の地域にすばらしい歴史があることを教えていただきました。
- ・地域、教師、郷土を思う方がたの願いをこめて建築されたこと、初めて知りました。学校の歴史、ことに「高遠の学」というコーナーは大変興味深いです。子どもたちの総合的な学習の場としてもぜひ学校でアナウンスしていきたいと思いました。

(2) 細見昭先生（信州大学農学部助教）

細見先生は分子細胞微生物学がご専門ですが、キャリア教育への関心も高く、中学生から教職員、保護者に向けての研修会もされています。

細見先生のお話からは「何のために勉強するの？」という子どもの問いかけに対して答える時に私たち大人はどう答えているか、「勉強する」こととはそもそもどういうことなのかを改めて考えさせられました。

細見先生は、中学生への話の例として『何のために勉強するの？』と尋ねると大人はイライラするんじゃない？物事には答えが明確にあるものかないものがあるけれど大人って答えが出ないことを聞かれるとイライラするんだよね」と。その上で「答えがない物事は、考えなければいけない。でも考えることって面白いことだよね」ということで、様々な発想で考えることの面白さを「サンデル教授の白熱教室」等を例に挙げてお話してくださいました。

また、自分で考える好きなこと・得意なことと、周りの人から見たそれが重なりあうところに個性があると考え、自分自身でも気がつかない個性や長所が見つかり、それが新しい興味関心や進路選択のきっかけになるかも、というようなお話もありました。

【参加者の感想より】

- ・「勉強は人生を楽しむもの、目的ではなく手段である」、なるほど！！と思いました。すっかり中学生になって聞いている自分がいました。自分の良い面を知る・・・このことが自分の生き方を考える＝キャリア教育につながるということを教えていただきました。
- ・「なぜ勉強するのか」という基本的な疑問を、中学生の立場で考える良い機会となりました。「どんな小さなことでも楽しむ経験を積み重ねていく」という言葉が印象に残りました。自分の担任する学級で心がけていきたいです。
- ・養護学校にいて、キャリア教育というと、
 - 小学部：自ら関わる楽しさを知る。
 - 中学部：自分でした事が人に喜んでもらえる。自分がはまり込めるものがある幸せを知る。
 - 高等部：今できることが社会とどうつながるか見極めていくということなのですが、働く生活のほうが長い人生において、これよりもっと大切なことがあったり、障がいがある中で自分の人生を作るための勉強って何なんだろう・・・と改めて思うことができました。今答えはでないけれど頑張って探さなきゃ、ですね。
- ・子どもの具体を想起しながら話をお聞きすることができました。先生の「答えのない物事を答えがある物事と同じように教えようとしている」という言葉の通り、子どもの納得のいく解にはなっていなかったらと考えさせられました。本校にもお話をしに来ていただきたいと思いました。ご連絡させていただきます。

(3) 田畑和輝先生（社会保険労務士 田畑事務所所長）

田畑さんは伊那市教育委員も勤めており、伊那市のキャリア教育といえば欠かせない存在。この分科会のあり方についても立ち上げからご尽力いただいています。

そんな田畑さんからは、キャリア教育を単なる「職業体験イベント」から「生き様教育」への深化を目指してきた伊那市での取り組みや意識の持ち方についてお話していただきました。日頃から教育委員の立場としてキャリア教育に対する企業側と学校側の両方の見方・考え方をつなぎ、橋渡しをしていただいている田畑さん。キャリア教育の中で大切にしたいワードは「郷土愛」。郷土に生きる子どもたちと地域の大人が共に生き様を考え合える場を、そして子どもたちが上伊那の大人の熱と郷土の文化を体感できる場を設けたい、そんな思いと共に、このとき2週間後に迫った「伊那市中学生キャリアフェス」に寄せる思いを熱く語っていただきました。

【参加者の感想より】

- ・私の娘が中学2年でキャリアフェスに参加してくると思います。子育てを伊那市でやって正解だったなあと思っているところです。上伊那の熱い大人の姿をたくさん感じて帰ってきてくれるとうれしいです。
- ・人の力、魅力ってすばらしいですね。「人」がキャリア教育そのもののような思いになりました。
- ・いかに社会がグローバルになり海外で活躍しても「自分のふるさと」の人、もの、こと、歴史等を語れないと相手にされないということを聞いたことがあります。やはり郷土愛の理念がベースにないといけないと思いました。
- ・「学校が核となって地域とつながる」「地域の方と共に学ぶ学習展開のある学校」を本気になって考えています。学校が働きかけることで、地域がかわっていくことが可能であるというヒントをいただいたように思います。
- ・子どもは変わっているのは日頃感じていることです。その一方、学校でやっていること、やらせていることは従来と変わらず、前年に習ってということが・・・どこかで大人が勇気をもって変わることが必要だな、と常づね感じていますし、再確認させていただきました。

3 まとめ

キャリア教育は喫緊の課題といわれながら、「実際何をしたらいいの」「そもそもキャリア教育って何？」という先生方も少なくはないのが現場の実態だと思います。今回お話していただいた3名の講師の方は皆さん、キャリア教育に関わって「声をかけていただければお話に行きますよ！」という熱い思いをお持ちです。クラスで、学年で、また職員研修として、話をお聞きすることからキャリア教育をスタートしてみるのも良いのではないかと思います。お三方とも気軽に声をかけてほしいとおっしゃっていました。

また、今回の企画には上伊那広域連合のキャリア教育コーディネーター（傳田智子さん。現在育児休暇中で井崎由華さんが代替）にも大変お世話になっています。「こんな話をお聞きしたい」「こんな内容でだれか話をしてくれる人はいないかな」、そんな悩みには上伊那広域連合だけでなく、各市町村教育委員会のキャリア教育コーディネーターの方も相談に乗っていただき、多方面から講師を紹介していただきます。

将来の日本を担う子どもたちと多くの時間を過ごす私たち教職員が、そして周りの大人たちが自分自身の仕事に誇りを持ち、その生き様を子どもたちに伝える機会を折に触れ持つことが「楽しいキャリア教育」につながるのではないのでしょうか。

（教諭 中島 千春）